

活動報告書

報告者氏名：八木佳子

所属：神奈川県立相模原養護学校

記録日：2014年2月23日

【対象児の情報】

- ・ 学年：小学部 4年生 男児
- ・ 障害名：知的障害
- ・ 障害と困難の内容
 - ・ 周囲の物や人の名前、簡単なできごととは言葉で、おおよそ理解することはできる。文字の理解は難しい。意思や要求などは、指さしや身振り、サイン（数個）、直接行動で表出し、発語は「はい」のみ。表出していることが相手に伝わらないことで、もどかしさを感じている様子が見られた。
 - ・ 人とかかわりを好み自らかかわるが、注目されたい思いから不適切な行動になることもある。また、様々な活動に意欲的だが、注意が散漫になりがちで行動をやり終えるには、支援が必要なことが多い。思いついたまま行動に移すことがある。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
 - ① 伝える手段を増やす。
 - iPad を使って、人に発信できることを知る。
 - ② 一連の行動をやり遂げることができるようにする。
 - iPad を使って、一連の行動に一人で取り組む。
- ・ 実施期間
平成 24 年 6 月末から
- ・ 実施者
八木佳子 （25 年度担任、森田 宏、根岸孝子）
- ・ 報告者と対象児の関係
平成 24 年度 クラス担任、平成 25 年度 他学年担任

【活動内容と対象児の変化】

① iPad を使って発信

・ 対象児の事前の状況

本児の表出に対し、かかわる大人が、目の前にあることや、前後の状況を考え、何をいっているか、言い当てる。それを聞いて、本児がうなづくか顔を横に振ることで答えるという、コミュニケーションになっていた。人とかかわることが好きなため、言い当ててもらったりやりとりを楽しむ様子もあったが、伝わらない時のもどかしさやいらだちを味わっている様子もみられた。

・ 活動の具体的内容

＜給食場面での活用＞

はっきりした要求が出やすいこと、担任が応じやすい場面であること、毎日確実に積み重ねられることから、給食時間で始めた。

●場面設定 …本児の机上、給食トレーの隣に置いて自ら扱えるようにした。

●使用アプリ…「絵カードコミュニケーション」に給食場面で使いそうなシンボルと学年の児童、担任の写真を入れた。

●かかわり方

・ おかわりが欲しくてお皿を差し出したときに「おかわりください」のカードをタップするように促す。音声を聞いてから要求に応える。

・ あいさつ当番として、A 児が「いただきます」をタップした後、みんなであいさつをした。 など

●使用シンボルを増やす

・ 本児が言いたいのではないかと考えられる言葉（本児の好きなこと、授業で行ったこと、休み時間にやっていたこと、連絡帳からの情報など）を、徐々に加えていった。



・対象児の事後の変化

- ・身振りや直接行動で表出していた「おかわりください」「やってください」「いただきます」「ごちそうさま」は、すぐに自ら iPad で言えるようになった。苦手な食べ物があるときに、騒ぐこともあったが、「いりません」とタップして避けることも出来るようになってきた。おかわりをもらおうと「ありがとう」とタップすることも覚え、スムーズに使っている。
- ・1 ページで 8 枚のシンボル設定で、始めは見分けづらい様子もあった。タップし音を聞いて自分で間違えに気づき、タップし直すことを数回繰り返す中で、見分けられるようになった。1 ページで 15 枚の設定に変更しページ数が増えても、無理なく目当てのシンボルを見つけることができるようになった。(見分けの力とシンボルの位置を覚えたこともあると思われる。)
- ・担任の写真をタップして、応えてもらおうと嬉しそうにしていたり、他の児童の写真をタップしてその児童を指さしたりする様子があった。
 - ことばが出る『VOCA 機能』によって、ことばを聞いて確認できることや、自分でことばを発しているような感覚をもてるのではないか。
- ・新しいシンボルが増えると、すぐに気づきタップして、ことばを確認している様子があった。本児が発したことばを受けて、それに応えることでことばのやりとりのようになってきた。
 - 給食の時間に iPad を扱うことについて、教員間でもいろいろな見方がある。食事のマナーは意識させつつ、会話を楽しむ団欒の時間ともとらえたい。

少し慣れると、自分で操作して他のアプリ(ゲーム的なもの)を開き遊ぶようになったため、アクセスガイドで、食事中はこのアプリのみ使用できるように制限をした。
- ・シンボルを増やしたことで、発信も確実に増えたが、同じことばを何度もタップしたり、やたらいろいろな言葉をタップしたりと「伝える」よりも「遊ぶ」ことも見られてきた。
 - 「自由に操作して遊ぶ」ことも大切だと考える。遊んでいる中で、シンボルがどの位置にあるかを覚え、必要な時に使いやすくなる。また、知らない言葉を覚えるきっかけにもなる。言葉を道具として使うようになるときに、その道具でたっぷり遊ぶことも必要ではないかと思う。そして、本当は本児のつぶやきだったりするかもしれない。その時々の本児の思いを想像力を駆使して読み取り、受け応えることで豊かなやりとりに発展させたい。
- ・身振り等で伝えきれない、目の前に無いことも伝わる(大人側の読み取りも含めて)ことがみられてきた。体調をくずし横になっていた時に、iPad で「ママ」「おうち」と何度も言っていた。



<個別学習場面での活用>



iPad で発信することに慣れ楽しむようになってから、さらに、発信内容の広がりを目指して、身近なできごとをことばで表現する(単語でなく二語以上で表現)学習を行った。

- 場面設定…Aくんや友達が活動している写真を見て、iPad を使って話す。
- かかわり方…写真を見て、担任が話をしたことをひと言ずつ、Aくんが iPad でタップすることから始めた。徐々に、だれがいるか、何をしているか、どんな顔をしているかなど、簡単な質問に iPad で答えられるよう促していった。

・対象児の事後の変化

- ・やりとりを楽しみながら、取り組むことができた。「だれが?」「何をしている?」などの質問に応えられるようになってきた。
- ・写真の表情を見て、同様の表情のシンボルをタップすることはまだ難しく、「笑っているよ」、「泣いちゃったね」などことばを添えると、そのシンボルをタップすることができた。
 - 写真の表情の読み取りについては、細かい部分の見えにくさもあると思われる。
- ・シンボルを下へ移動させ、複数並べてから音声を出す方法は、まだ促しが必要だが、ことばが連なって聞こえると、満足そうにしている。

②一連の行動をやり遂げる

・対象児の事前の状況

クラスの係活動（ゴミ捨て、健康カード提出など）や自分の荷物整理、着替え等を行う際に、行うことは分かっているが、他のことに注意がそれたり、一緒にいる教員へのアピールか他の行動にむかっていると、やり終えることが難しい。

・活動の具体的内容

まずは知っている行動を、iPadを使って人とのやりとりをする場面を含めて行う。

●場面設定 …朝の係活動「保健室へ健康観察カードを持っていき、挨拶をして渡し、教室に戻ってくる」

●使用アプリ…「Pic Collage」で場面ごとのカードを作成し、「DropTalk」のキャンパスに貼りつけて簡単なスケジュールにした。

保健室に
行ってきます



お仕事
終わりました

●かかわり方

・始めは一緒に行動しながら、場面に応じたキャンパスをタップして発信することを伝えた。徐々に離れて一人でやるようにした。

・対象児の事後の変化

・教室を出る時に「ついてきて」と身振りで担任を求めることもあるが、途中からは一人で向かうことが多くなった。

・途中で画面をめくりながら歩き、他の画面に移っていても、保健室に到着すると、自分で必要な画面に戻し挨拶をすることができるようになった。

・行き帰りに他の場所へ行く、他のことをする（廊下で寝そべるなど）こともなく、やり遂げることができた。

→保健室で先生とのやりとり後、教室へ向かう足取りがとても軽かったことから、少し緊張感を持って出かけ、戻る時は達成感を味わっていたのではないかなと思う。

・その後の取り組み

・保健室の係が、出来てきたため、給食調べの係も用意した。同様のアプリを使い5場面でもVOCA&スケジュールの形にし、取り組んだ。

数回行う中で一人でやり遂げるようになった。



【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

VOCAアプリを使うことで、自らことばを発している感覚を楽しんでいるように見られ、伝わる楽しさ、満足感を味わう中で、周囲の人と心地よくかかわる時間が増えた。また、決められた一連の行動を一人でやり遂げることで、敢えて気をひくための注目行動をとらなくても済むようになった。

伝わる楽しさ、やり遂げた達成感を積み重ね、さらに人と心地よくかかわれるようになってほしい。

○気づきに関するエビデンス

・「絵カード/C」の発信履歴（単語）より発信回数（図1）を見ると、シンボル数（図2）の割合からみても、身近な人の発信が多い。これは、「〇〇先生、おかわりください。」「〇〇先生、ありがとう」などと、名前を呼びかけて発信することが増えたことによる。名前を呼びかけられた方がより嬉しい気持ちになるとの教員の声があり、Aくんの発信により、周囲も心地よい雰囲気になっていた。

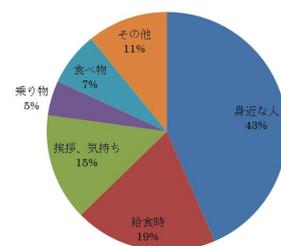


図1 カテゴリー別発信回数
(25年11月10日間の記録より)

・教員と一緒に係りの仕事を行っていた時は、移動中に廊下で座り込む、

違う方向へ行くなどの行動があったが、一人でやり遂げることにより、スムーズな移動となった。

○その他

- ・発語は「はい」のみだったが、「ママ」「バイバイ」「パン」「アイパット」などらしく聞こえることばが増えた。また、ジャーゴン風の発声の中で出せる音が増えてきた。
- ・休み時間の遊びの中で、Aくんの好きな教員に向けて、簡単なビデオレターを制作（Aくんの様子や身近なできごとから、担任がAくんになったつもりでメッセージを作った。Ex「ぼくが図工で描いた絵です。〇〇先生、見てください。」）AくんがiPadを持ち、この教員の所へ一人で行き、自分で動画を再生することで、やりとりを楽しんだ。
- ・Aくんがカメラで撮影する取り組みについて、シャッターを操作することは自分でできるが、対象物に向けてiPadの角度や位置を調整して持つことが難しかった（Aくんの身体の大きさ、手の操作性から）。担任がiPadを保持し、Aくんが方向づけてシャッターを押していた。撮った写真を見直して嬉しそうな時もあるが、興味を示さないことが多かった。

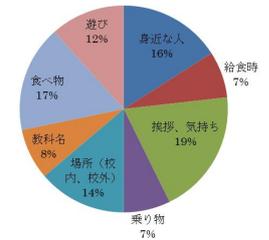


図2 カテゴリー別シンボル数

【今後の課題】

○実践を振り返って

AくんがVOCAアプリを使用し、伝わることを理解できてきたことから、コミュニケーションツールとして、活用できるだろうと手応えを感じ、取り組んできたが、活用場面は給食時間や係活動、個別学習時以外に広げることができなかった。クラス内の他児への影響等、難しい面もあるが、活用に向けての検証、工夫も足りなかったことを反省している。また、周囲との兼ね合いも考慮してiPadを使えそうな場面という発想であったことも、活用が進みにくかった一因ではなかったかと思う。Aくんが話したい気持ちの強い場面という視点を一番に場面設定するべきであった。

○今後の課題

- ・発語の代わりにiPadを使い、よりAくんの言葉に近づけるために。

① カメラ使用の検証

対象物にカメラを向けることが難しいことから考えられることは、

- ・自分で操作ができると興味が違うのではないか。
→ iPod やデジカメの使用を試みる。
- ・視覚的な捉えにくさから画像の中の対象物を見ることが難しい面があるのではないか。
→ 動画や音声付きにしてみる。見え方を探る。

② 文字で表出することを目指した文字学習に取り組む。

実態から文字理解は難しいと抑えていたが、2～3文字の単語で文字マッチングができるようになったこと、なぞりアプリを進んで行いなぞった後の音声を楽しんでいる様子から、文字を使うことの可能性もあると思われた。発信したいことのシンボルが無い時に、文字入力ができるように、文字学習をすすめたい。

- ・使用する場面をどう設定していくか。

① 学校生活全般の見直し。

少しの時間でも発信に使える場面の工夫をする。

② 家庭との連携

VOCAアプリに拘らず、写真の持ち帰り等で、家族との共通の話題を楽しむことから、活用の広がりを模索する。